

東京バッハ合唱団 月報

[第736号] 2023年10月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.736

October 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

《マニフィカト》と《クリスマス・オラトリオ》

12月に、抜粋でシングイン(都内2会場、荻窪と神田・三崎町)

大村 健二 (団員)

バッハのこの2作品を並べてみる機会はあまり多くありません。少なくとも、われわれの合唱団の60年の上演歴のなかでは、同じ舞台で取りあげたことはなかった。《マニフィカト》の全曲演奏には30分ほどを要します。《クリスマス・オラトリオ》は、第1部から第6部までを通して上演すると150分ほどが掛かります。合わせて3時間。まあ不可能な分量ではなさそうですが、意味があるのかなのか？

ワグナーの《指輪》はぶっとおしで演じれば15時間だそうですが、普通は4、5日から1週間ほどに分けて上演されています。我慢大会でなく、芸術鑑賞としてはこんなものでしょう。休憩や気分転換は、お客にとっても出演者にとっても、当然の権利です。

というわけで、合唱部分だけを中心に抜粋して、30分ほどに圧縮してみました。

《マニフィカト》は、オーケストラと5声部コーラスの華やかな冒頭合唱はもちろん、残りの合唱曲全5曲と、クリスマスシーズンですから、挿入曲のルター・コラール〈高きみ空より〉などのクリスマス聖歌も加えてあります。

《クリスマス・オラトリオ》は、第2部冒頭の静謐なシンフォニア(キリスト誕生の前夜の、管弦楽によるパストラレ)に導かれて、このシーズンにおなじみの優しいコラールを、たっぷりと歌い尽くしてみたいと企画しました。聴くもよし歌うもよし、お仲間お誘いあわせで、ぜひお出かけください。

◇《マニフィカト》について

《クリスマス・オラトリオ》に関しては、ほぼ毎年、季節の到来ごとに、前半・後半に分けたりなどさまざまな形でお届けしてきましたし、そのつど説明もしましたが、《マニフィカト》は久しぶりです。来年の定期演奏会(秋)で、ソリストも含めた完全編成の全曲をお届けする計画です。本格的な解説はその折にゆずり、ここでは、そもそもの《マニフィカト》の周辺に触れ



■ 受胎告知 (フラ・アンジェリコ、15世紀、フィレンツェ)

させていただきます。

《マニフィカト》は、イエス・キリストを胎に宿したことを知った若いマリアの、驚きと喜びと感謝と覚悟とを、神に向かって歌い上げる讃歌・祈りであり、新約聖書に書き留められています

私の魂は主を崇め

私の霊は救い主である神を喜びたたえます。

この卑しい仕え女に 目を留めてくださったからです。今から後いつの世の人も 私を幸いな者と言うでしょう。

力ある方が 私に大いなることをしてくださったからです。

その御名は聖であり

その慈しみは代々限りなく 主を畏れる者に及びます。主は御腕をもって力を振るい 思い上がる者を追い散らし

権力ある者をその座から引き降ろし 低い者を高く上げ

飢えた人を良い物で満たし 富める者を何も持たせずに追い払い

慈しみを忘れず その僕(しもべ) イスラエルを助けてくださいました。

私たちの先祖に語られたとおり

アブラハムとその子孫に対してとこしえに

(ルカによる福音書1:47-55)。

月報 2023年10月号 CONTENTS

- ・ご案内「参加者と合唱団員によるシングイン」…p.2
- ・「日本人」から「地球人」へ(大村恵美子)…p.3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [32](大野博人) p.4

ルカ伝の物語は、洗礼者ヨハネの誕生の予告から始まります。信仰心熱い祭祀ザカリヤの妻エリサベトが高齢になって男子を身籠るといふ不思議が起こった。その6か月後、天使ガブリエルが、マリアというおとめのところに遣わされて、「あなたは神の子を生む。(…)

不妊の女と言われたあなたの縁者エリサベトもすでに身籠った」と告げた(前ページ挿図の場面)。マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と答えます。のち、マリアがエリサベトのもとを訪れて挨拶すると、エリサベトの胎内の子が踊った(1;41、その胎児がのちの洗礼者ヨハネ!)。聖霊に満たされたエリサベトが「あなたは女の中で祝福された方……、なんと幸いでしょう」とマリアに答えると、感極まったマリアの口をついて溢れ出た言葉が「私の魂は主を崇め……」だったと聖書は伝えています。身籠った二人の女性の、不思議と喜びと感謝に満ちた対話のなかで生まれた讃歌であったことを、心に留めたいところです。

◇マニフィカトの言語の変遷

「マリアの讃歌」と称せられますが、マリアが神を讃美しているのであって、マリアを讃える歌ではありません。聖書が編纂される以前の原始キリスト教の時代、キリストの十字架死から十年、二十年というほどの、イエスの記憶のまだ生々しいころに、すでにカンティクム(頌歌)として整えられ、キリストを慕う人々の集まりで歌われていたものの一つだったとされます。もちろん当時の土地の人々の母語(マリアの発語に由来すると想定して)で歌い継がれていたのですが、ヘレニズム化が進むなかでギリシャ語に置き換えられていったようです。ご存じのとおり、新約聖書の編纂は、当時の世界語・文明語であるギリシャ語でなされました。その後、ローマ帝国支配下では、キリスト教徒迫害から国教化への転換を経て、ラテン語世界での正統化が進められ(ローマ・カトリック)、キリスト教はラテン語に染まります。典礼のなかでのラテン語からの解放は、実に20世紀後半の第2ヴァチカン公会議(1962年から1965年)を待つことになりました。

この讃歌の歌い出しのラテン語“magnificat マニフ

■エゾノコリンゴ(蝦夷の小リンゴ)(撮影:千葉光雄)



◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

参加者と合唱団員によるシンゲイン

——聴くもよし、歌うもよし。楽譜用意あり——

マニフィカトとクリスマス・オラトリオ

客席からご参加いただけます/経験者はご自分の楽譜持参でどうぞ(原語、可)/初心者の方でもご遠慮なく、バッハの合唱を体験してみてください/もっぱら鑑賞、もちろん歓迎です。

<日程と会場>

① 12月2日(土)、荻窪教会、14時-16時

② 12月9日(土)、三崎町教会、14時-16時

<出演者>

[指揮]大村恵美子、[管弦楽]コレギウム・アルモニア・スペ

リオーレ・ジャパン(略称ARS)、[オルガン]田尻明葉

[合唱]東京バッハ合唱団/ご参加のみなさん

<入場参加>(予約受付:10月10日より)

・入場参加費…1000円(楽譜代・資料代をふくむ)

・会場①…定員50名(予約優先、定員でしめきり)

・会場②…定員150名(予約優先、当日枠たっぷり)

・参加申し込み[①②とも]…東京バッハ合唱団事務局

電話03-3290-5731、メールoffice@bachchor-tokyo.jp

[主催]東京バッハ合唱団 [①後援]杉並区

[協力]日本キリスト教団 荻窪教会

[同上]日本キリスト教団 三崎町教会

ィカト(崇める、の意)”をとって、中世以来のこの重要な典礼音楽は「マニフィカト」と称せられることになりました。「私の魂は主を崇め……」は、ラテン語「マニフィカト・アニマ・メア・ドミニム……」として、1500年の歴史を経てきたのです。若い女性の口をついて心の底から湧きあがった“驚きと喜びと感謝と覚悟”の祈り、その初々しさを嗅ぎとるのには相当な想像力を要するのではないのでしょうか。東洋の異教の地、日本に限らず、ラテン語の系統に連なる文化にあってさえ、現代にラテン語を発音するときには、自分が知的でスマートな衣をまとっているという錯覚から逃れることは難しいでしょう。マリアは、中東の砂埃の香りとともに暮らしていたのかもしれないのです。

大雑把ながら言語にこだわったのは、この讃歌が“うた”であることを強調したかったからにほかなりません。“うた”は、ここで歌います。

◇「エリサベトのマリア訪問の祝日」のための作品

ルカ伝に語られる上記の出来事を記念して、キリスト教会では、「エリサベトのマリア訪問の祝日」が定められています。カトリック教会では5月31日、プロテスタントでは7月2日。バッハの場合は後者です。

1723年のこの祝日(7月2日)のためにバッハが上演したのは、かの有名なBWV 147《心と日々のわざもて(心と口と行いと生きざまもて)》でした。ライプツィヒ転居(5月22日)後わずか5週間ほどのあわたたしい中、骨組みは前任地ヴァイマル時代の待降節用の別稿を利用しています。



■赤とんぼとハタザオキ
キョウ（旗竿桔梗）
（撮影：千葉光雄）

同年のクリスマス（12月25日）の晩課のために、バッハは、クリスマス用挿入曲を添えた変ホ長調の《マニフィカト》初稿をまとめました（BWV 243a）。後の第2稿（BWV 243、ニ長調）と本体の骨格は変わりません。このときに実演されたかどうかは不明だそうですが、音楽は確かに用意されました。

翌1724年の7月2日のためには、ルター訳新約聖書の同箇所ドイツ語テキストへの付曲によってカンタータ《わが魂 主を崇め》BWV 10を初演しています。[ちなみに、このBWV 10の訳詞付き楽譜は、先月号で触れた「楽譜完結計画」の第1年次（2024年）での発行予定で、版下も校了しています。いずれ、われわれの上演によってもご披露できるでしょう]

肝心の《マニフィカト》第2稿の初演は1733年に至ってからのようです。ドレスデン宮廷のための働きかけが頻繁になったころですが、そのあたりの事情は来年の定期公演が近づいたころまでお待ちください。

◇この日の演奏楽曲

(1) 《マニフィカト》より（正味計16分）

- ・第1曲. 合唱（SSATB）〈マニフィカト（わが心 主を崇む）〉
- ・挿入曲 A. 合唱（SATB）〈高きみ空より〉
- ・第4曲. 合唱（SATB）〈ひとみな よろず代まで〉
- ・挿入曲 B. 合唱（SSAT）〈よろこび歌え〉
- ・第7曲. 合唱（SSATB）〈力 充つる〉
- ・挿入曲 C. 合唱（SSATB）〈グローリア 天なる主に〉
- ・第11曲. 合唱（SSATB）〈昔 世につげたまひしごとく〉
- ・第12曲. 合唱（SSATB）〈グローリア 父に〉

(2) 《クリスマス・オラトリオ》より（正味計14分）

- ・第10曲. シンフォニア（管弦楽）
- ・第12曲. コラール（SATB）〈きよらの あげぼの〉
- ・第17曲. コラール（SATB）〈いぶせき うまやに〉
- ・第23曲. コラール（SATB）〈み使いと ともに〉
- ・第28曲. コラール（SATB）〈主は 成したまえり〉
- ・第33曲. コラール（SATB）〈み言葉を まもり〉

- ・第35曲. コラール（SATB）〈よろこべ み神は〉
- ・第24曲. 合唱（SATB）〈あまつ君よ 聞きたまえ〉

◇合唱団の練習にご参加いただけます

《マニフィカト》は、毎回の練習でとりあげています。《クリスマス・オラトリオ》についても、今回の歌唱部分、コラール6曲と合唱（上掲参照）は、11月から“おさらい”を始めるはずです。シングイン参加のお試しを！ 歓迎です。お問い合わせください。

「日本人」から「地球人」へ

大村 恵美子（主宰者）

今ここに生きている自分は、何人（なにじん）か？

国籍から言えば「日本人」。日本人として、義務も権利もあるけれど、他人に接するときには、どんな心構えでいるのがいいのか？ それを考えると、私は「日本人」であることに、あまりこだわらない方がいいような気がする。

日本人を、冷静な目で見ると、どんな特徴が思い浮かぶだろうか？ 好意的に見る時には、割合に「しとやか」で、対人的には「親切」「あまり強く立ち入ろうとしない」、つまり自分のカラーを押し付けようとしない、一緒にいても面倒がなさそう。

批判的にいえば、あまり積極的にあたたかい好意を示したり、係わりを持とうとしたりはしない——こんなところだろうか。

他国人に対しては、それほど自国を誇らしげに思ったり、卑下したりもしない。では、こんな現状でいいのだろうか、と考えると、私はあまり差し出がましいのも良くないが、もう少し積極的に、人類全体のために、大きな気持ちが働いて、貢献してもいいのでは、という気がする。

自分たち日本人の良さを強調することはないが、ただ仲間に加わっている、というだけでなく、出来ることがあるなら、なるべくこちらからも、その意欲に従って、自他共にプラスになることに貢献しようと、努力してもよいのではないかと。他国の人々と同じ地球に住んでいることで、共々になるべく親しい気持ちでつき合ってもいいのではないかと。兄弟姉妹がそれぞれ独自の友人関係を持っていても、兄弟同士も仲良くするように、つまり家族が親しいように、他人とのいろいろな付き合いも楽しめるのだと、人生の内容も深まるのではないかと。

それにはやはり、まず「日本人」同士がお互いを満足に認める気持ちになり、それを他国人たちとも取り交わす、そういう、ゆったりとした、煩わしきのない関係であることが大切だと思う。同じ時代に生きる者同士は、どんな関係であっても、仲間意識で親しく心を取り交わして行きたい。

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [32]

自由主義的庭園



安曇野閑人 大野 博人

大都会の街路樹は孤立している。

一本一本離して植えられていて、コンクリートの世界の中でさびしそう。まわりも石畳やアスファルトに覆われている。土は根元に少しのぞいているだけ。

都心を歩いていて、木々を気の毒に思うようになったのは、安曇野の雑木林の中で暮らし始めてからだ。家のすぐ外で、たくさんの松が高さを競い、その間にさまざまな広葉樹が好き放題に枝を広げている。規則性はない。けれど躍動感にあふれている。

雑木林の一面はうちの敷地ではある（宅地として売られていたわけではないので区画がやたらと広い、そしてやたらと安い）。一応、自分の「庭」ということになる。けれども、枯れた松を間伐してもらうくらいで、ほとんど手を入れていない。

というか、手を入れても追いつかない。

引越してきた当初は、しゃれた庭づくりを夢見た。居間の前あたりは花壇にしようと石などで囲いをつくってみた。そこに花のタネをまいたり、球根を植えたり。しかし、都会のマンションのベランダを演出するような発想は、まったく通じなかった。

都会的な花は、雑木林の木陰になるとなかなか咲かない。いくら咲いても、うっそうとした雑木林を背景にすると存在感を示せない。

困惑していると、このあたりに自生している草花が自分で居場所を決めて増えていった。植えたおぼえもないところに、ヒガンバナやシバザクラの領域が広がる。オダマキもルピナスも。花壇のつもりで囲いも無視。

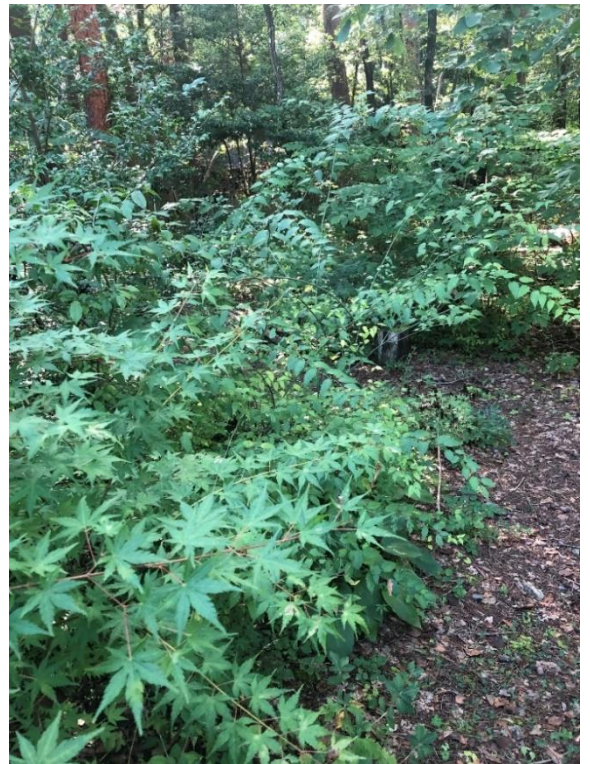
樹木だって、ヤマザクラやヤマボウシ、何種類かのモミジが勝手にあちこちですくすくと伸びている。まわりの林から風や野鳥に運ばれたタネが芽を出して生えてくるらしい。人が幼木を植えたわけでも挿し木したわけでもない。これは「実生（みしょう）」と呼ぶそうだ。

もちろん雑草も生い茂る。あまりにひどくなったら抜いたり刈ったりするけれど、焼け石に水。汗だくで除草作業をしていると通りがかった近所の人が声をかけた。

「ほっといても、秋になったら枯れてなくなりますよ」

自然のままのたたずまいで知られるのは英国の庭（イングリッシュガーデン）だが、それはもちろん入念に手を入れた結果である。うちの場合は、ほったらかしているだけ。自然に見えるというより、そのまま。

家を建てたとき、建築作業のために周囲を少し伐採



■庭に勝手に生えてきたモミジ。こんなのが何本もある。もう少しで紅葉が始まる（撮影・説明とも筆者）

した。玄関まわりも殺風景だった。そこで、地元の庭師に相談したら、樹木を愛する彼は拙宅を見ると困ったものだという顔をした。

「こうやって家を建てると、地下水の流れも変わってしまうんですね」。

家を建てたのが申し訳ない気分になった。

「まわりが立派な雑木林なので、玄関前に植木をしても貧相に見えるんですね」とも。

とはいえ、いろいろと工夫をして何本かの木々を植えてくれた。さいわい、それが数年後にはちゃんと育って、今ではまわりの雑木林にも負けていないくらいだ。

それどころか実生のモミジなども増えた。玄関前の植え込みにしては、ずいぶんワイルドになった。いくらか伐採した方がいいのではと思い、また相談した。

「いや、このままでいいでしょう。この感じ悪くないですよ」。植生をほったらかしにするのが好きな庭師である。髪を切るのが嫌いな理髪店みたい。

さて、東京では、神宮外苑再開発が物議を醸している。経済性を重視するビジネス界が信奉するのは自由主義であり放任主義である。競争に任せれば、それぞれが適当な居場所におちついてすべてがうまくおさまる、という思想だ。だとすれば、うちの庭は自由主義の結果だといえるかも。神宮外苑もそのままにしておいたら？

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

【編集後記】

地球という星が溶けだしたのだそうです。この夏、あまりの暑さでクーラーも悲鳴をあげて止まってしまいました。グレタさんの訴えが、ようやく身に沁みています。(K)